

# 障害児のきょうだい及びきょうだい支援に関する先行研究の到達点

竜野航宇 埼玉大学大学院教育学研究科特別支援教育専攻  
山中冴子 埼玉大学教育学部特別支援教育講座

キーワード：障害児のきょうだい、障害児の親、きょうだい支援

## 1. はじめに

障害児の兄弟姉妹（以下、きょうだい）については、障害児や親を支える役割を期待される傾向にあること、それに伴い、何らかの困難を抱える傾向にあることが言われてきた。そして近年では、きょうだいの抱える困難やその要因がいかに多様であるかを明らかにしようとする研究が増え、それに伴い、実際の支援もより充実させることが求められている。

そこで本稿では、国内におけるきょうだいやきょうだい支援に関する先行研究の到達点を改めて明らかにし、きょうだい支援を今後充実させるために必要な研究の方向性についての考察を試みる。

まず、きょうだいの困難が表面化する一つの要因として親からの影響が指摘されているため、障害児の親に関する先行研究をまとめ、きょうだいを取り巻く家庭環境を捉える。

次に、先にも述べたような障害児や親を支える役割の期待がきょうだいにどのような困難を抱えさせるのか、そして、それに対応するための支援がどのように模索されているのかを整理する。

以下から、表現上の混同を避けるため障害のある兄弟姉妹を「障害児」、障害児をもつ兄弟姉妹を「きょうだい」とする。

## 2. 障害児の親に関する研究について

きょうだいの困難の表面化に親の養育態度が大きく関与することは、以前から指摘されてきた（三原2000、田倉2007）。障害児と共に生活することによって、障害児家族、特に親の直面する困難が学術的に明らかにされ始めるのは、1980年代頃である。

例えば稲浪・西・小椋（1980）は、障害児との生活によって親が被る心的負担を測定することを目的に、自閉症児、精神薄弱児（知的障害児）、肢体不自由児、盲児の母親を対象に、「親自身の問題」、「家族の問題」、「障害児の問題」の3部門15尺度に分けた質問紙QRS（Questionary on Resources and Stress）調査を実施した。その結果、子どもが自閉症、肢体不自由、盲、精神薄弱（知的障害）の順に母親の心的負担は総じて高く、特に心身不健康、世話として割く時間の多さ、親としての拒否的態度や過保護、子どもの活動性の欠如などといった尺度が優位に高かったという。

渡辺（1982）は、広く障害児の親が直面する困難として、障害児の知的な水準、発達の偏り・遅れ等の組み合わせによる全体像を捉えつつ、以下の三つを指摘した。

まず、「わが子の障害に初めて直面する心理的衝撃」である。多くの家族は、生まれてくる子どもの障害を疑わない傾向にあるため、障害児の誕生に大きな衝撃を受けるといふ。

二つ目に、「障害児が自分から母親を刺激し、要求をコミュニケーションする能力が劣るために生じる」困難である。障害児の伝達する力の弱さもしくは反応の弱さを敏感に感じ取り、その子が受け入れやすい応答の仕方を工夫できないと、子どもとの絆を深めることは難しい。

三つ目は、「障害児に日常的に必要とされる養育を与えていくという役割は多大な時間と労力と精神力を要する」ことによる困難である。障害児の発達を促すためには、障害特性等の専門的な知識を要する場面も少なくなく、時間と心身を削るといふ。これらは一時的な困難ではなく、長期的に持続する可能性があることに加え、これらの困難が同時に幾重にも重なると指摘されている。

新美・植村（1982；1984）は、学齢期障害児を育てる上でのストレスが、時間とともに量のみならず質的にも変容するという仮説をもって、父母間のストレスの違いを調査した。その結果、母親に比べ父親は障害児と関わる時間を多くもたない傾向にあり、そのことによって双方のストレスの抱き方が異なることが判明した。加えて、障害児の年齢が上がり、学校からの支援を得られるようになることで、母親と父親の「将来不安」や「療育不安」は減ずると分かった。

以上を踏まえつつ、1990年代以降は、家族機能という観点が付加され、親の直面する困難が把握されるようになっていく。

田中（1996）は、家族機能を評定する質問紙とストレスを評定する質問紙の二つを用いて「充実した家族の連帯感・家族のきまり」（家族機能）の存在が、母親自身のストレスや夫婦間のストレスを軽減させることを述べた。また望月（1999）は、知的障害児を育ててきた親に面接を実施し、配偶者やきょうだいによる支えを実感している親ほど、障害児の養育における心身の負担感や障害児の将来への不安が軽減できていることを示した。つまり、家族内でのサポートの在り方が、親の負担軽減に大きく関わっていると言える。

また2000年代に入ると、発達障害のある子どもへの関心の高まりとともに、その保護者にも焦点を当てた研究が登場する。

渡部ら（2002）は、広汎性発達障害児をもつ母親に着目して、脳性麻痺や運動発達障害児の母親の抱える困難との相違を明らかにしている。一見すると分かりにくい広汎性発達障害を理解することは、家族、周囲の人々にとっても難しく、特に母親に孤立感を抱かせるという。加えて、運動発達障害に比べ診断時期が遅れる傾向にあるため、専門家や療育者からの介入も遅れ、いつそう母親を追い詰めるという。しかし、母親の直面する育児上の難しさに対して共感し、障害児を育てることを積極的に支えていくような家族機能があれば、母親は疲労感を抱きにくい傾向にあることが明らかにされた。また野邑ら（2010）は、高機能広汎性発達障害児の母親について、行動問題を理解し共感することの困難は、母親に抑うつを引き起こし、さらにこの抑うつによって障害児との関わりが悪化することを報告している。

このように親の直面する困難に関わって家族機能の重要性が明らかにされるとともに、発達障害への関心が高まっていることと合わせて、近年、貧困の深刻化が影を落としていることが指摘されている。厚生労働省の生活基礎調査（2013）によると、17歳以下の子どもの6人中1人は貧困層であり、子どもの貧困率は上昇傾向である。ここに障害児への影響をみてとることが重要となっている。

江尻（2015）は、障害児の母親における就労の現状と課題を述べている。障害児を育てる母親の就業率は、一般有配偶者女性のそれと比べると低く、このことによって障害児の母親は経済的な困窮に陥るのみならず、精神的な安定や社会との繋がり等が妨げられているという。その背景としては、母親が家庭で子どもを育てなければならないという性役割観、家族や職場における障

害児を育てる困難さについての理解の希薄さ等が指摘されている。

窪田（2015）は、貧困の深刻化による障害児家族の生活困難を検証する中で、一人親の家庭特有の困難を挙げている。近年、子育て上の意見の食い違いなどによる離婚で一人親の家庭が増えているという。障害児家族においては、わが子の障害を受容する難しさから夫婦間で衝突が生じることが少なくなく、離婚の契機となってしまう可能性があることが前から指摘されているが、加えて、障害児をもつ一人親家庭は経済力不足に陥る危険性や、障害児を育てる負担を一人で背負いきれず心身共に崩壊する危険性に直面する傾向にあるという。

このような研究と共に、1960年代頃から、親自身によって障害児の親への支援の取り組みが積み重ねられてきた。自分たち家族だけで障害児の生活が支えられるのかといった不安から親の会がつくられ、障害者施設や養護学校の設置からグループホームや作業所の設置、そして障害児者本人の会の設置等、要求や運動内容を変化させながら、障害児の保護・育成に力点を置いた取り組みが各地で蓄積されてきた（前嶋・米田、2003）。主として障害児の保護・育成に向けた動きが、障害児家族を支える活動として理解されていたと言える。

その後親の会は、例えばレスパイトの機能や地域資源に関する情報提供といった、セルフヘルプグループとしての性格をもつようになった（島崎、1998）。これは、親の会が巨大化したことで若年層の親が参加しにくくなったことを受けてのことであったという（島崎、1998）。

林ら（2002）は、親の会によるセルフグループへの参加を通して、障害児の親自身が子どもの障害の理解や価値観を変容させることを報告している。当初、多くの障害児の親は「何を話しても健常児の親とは話が通じない」といった疎外感を抱いたり、障害を受容できず「障害を治す」ために奔走したりしていたという。しかし、親の会で似た境遇の親との出会い、安心し、情報の共有や子どもへの関わり方を知ることで、葛藤をもちつつもわが子の障害を受容するきっかけが与えられたケース等を踏まえ、このような会の存在が親にとっての居場所となり、社会に出ていく意欲にもつながることを明らかにした。

また、近年の発達障害への注目に関わって、注意欠陥多動性障害児をもつ親に焦点を当てたペアレントトレーニング（富沢・横山、2010）の報告もなされている。

### 3. きょうだいに関する研究について

以上のように、障害児をもつ親の抱える困難やそれに対応するための取り組みが徐々に展開されてきたが、先にも述べたように、同じ家族であるきょうだいは、親の困難を目の当たりにしつつ、親と障害児を支えるための役割を大きく担う存在として把握されてきた（三原、2000）。きょうだい研究は、1990年代から先述の親についての研究を追うように、本格的に開始されたと言える。

吉川（1993）は、高校生以上のきょうだいを対象に「同胞のことで親から期待されている」ことや、「親の老後と同胞の将来の生活について親／自分はどう考えるか」等の項目を設けたアンケートを実施した。そして、多くのきょうだい達が、親から親の代わりに障害児を世話する役割を期待されることや、それに対して自負心を抱いていたことを明らかにした。また、女性のきょうだいのほうが、男性のきょうだいに比べ、幼い頃から、そして将来に至るまで障害児の世話を期待される傾向にあることを述べている（吉川、1993）。

また西村・原（1996）は、きょうだいの出生順位や障害児との年齢差によって生じる困難の違いを報告している。そもそもきょうだいは自らも発達途上にあり、彼らが障害児や障害を理解し受



容する過程は直線的ではない。その上で親から障害児を世話する役割等を任されても、葛藤を抱きやすい傾向にあるという。また、出生順位でいえば、きょうだいが弟もしくは妹である場合、本来の兄弟姉妹の役割が逆転しやすく、きょう代いは「年下の自分がなぜ兄（姉）の世話をしなくてはならないのか」と葛藤を抱きやすいという。

三原（1998）は、多くの親が障害児に付きつきりになり、きょうだいと関わる時間をなかなかもてない等により、きょうだいに孤立感や不安を生じやすい傾向があると指摘している。一方、他にもきょうだいがいる、親以外の家族がいる場合には孤立感を抱きにくいと述べており、家族の規模もきょうだいの困難の在り方に関わっていることが明らかにされている。

吉川（2001）は、上述のきょうだいの性別、出生順位、家族の規模に加え、家族の経済状況によっても直面する困難の在り方が多様であることを述べている。そして、きょうだい各々が有する困難や考えの多様性を把握し、支援の形態を考える必要性を指摘した。

立山ら（2003）は、きょうだいの示す夜尿、円形脱毛といった気がかりな兆候が表れる原因を整理している。親が障害児を育てることで手いっぱいになること、障害児の入院や療育による親の不在や、親の大変さを目の当たりにすることによって、きょう代いが自分を出せないこと等を原因として挙げている。

柳澤（2007）によれば、障害を診断されても実際に障害児の行動特徴は様々に異なっていることが一般的であるため、きょう代いが障害児の障害を理解し受け入れ、対処していくプロセスも、また各々であると述べている。

さらに戸田（2012）は、きょうだいの発達段階における心理特徴に注目し、支援に取り組む必要性を訴えている。例えば幼児期のきょうだいの心理特徴を、大人の評価に過敏になり「ほめられたい」一心で障害児の世話する役割を進んで引き受ける、既にそのような役割を進んで引き受けながらも、そのような役割を自ら進んでより一層引き受けてしまう危うさを内包しているものと捉える。それにより毎日障害児を優先し、自分のやりたいことを我慢し、家族で遊びや体験に触れる機会をもてないと考えられる等、発達段階における心理特徴の把握は、困難の現れ方と求められる支援の在り方を検討する材料になるという。このような場合、レクリエーションを通してきょうだいとしての役割を忘れさせ、のびのびできるようにし、きょう代いがボランティアスタッフ等に「受け止めてもらえた」と感じられるような対応を試みることが求められる（戸田、2012）。

近年では、きょうだいの抱える困難の多様な要因をより詳しく調べていくために、質的な研究方法が用いられるようになってきた。例えば、きょう代いがどのようなプロセスを経て障害児との関係を受け止めていくのかを探るため、きょうだいに対して半構造化面接を行い、そこから得られた多様な語りを分析した研究（田倉、2008）がある。田倉（2008）による研究では、障害児に障害がなければ期待できた関係への思いと現実の障害児との関係を受け止める感情の双方が、きょうだいの中に混在することが明らかにされている。また進路選択や結婚といったライフイベントによっても、障害児との関係の受け止め方が大きく揺れ動くという。

また笠田（2013）は、きょうだいという立場がライフコース選択にどのような影響を与えるのか、そして、きょうだいとしての困難の解決もしくは維持にいかに関わっているのかについて、中年期のきょうだいに半構造化面接を用い、複線経路・等至性モデルを援用して分析している。その結果、障害児をサポートする方向へと最も影響を受けやすい出来事は進路・職業選択であることや、親から自由なライフコース選択を保障してもらうことがきょうだいの葛藤の解決に繋がることを明らかにした。

このように、きょうだいの抱える困難やその背景についての一元的理解を超える研究が開始されたと言え、その方法も質的研究法が取り入れられるなど、きょうだい研究の新たな展開がみられる。

#### 4. きょうだい支援を行う団体・組織の現状と課題

きょうだいの当事者団体の先駆けとして1963年に設立された全国障害児者とともに歩む会（以下、きょうだい会）は、社会の現状が変化する中で、共通した悩みを抱える者同士で力を獲得していく場としてのセルフグループの機能をもって、全国で組織的にきょうだいの支援にあたってきた。前嶋・米田（2003）によると1960年代から1970年代、障害児を支える社会資源は多いとはいえ、社会における障害児の人権に対する意識も未熟であったため、きょうだい会は、障害児の代弁者として福祉資源の乏しさや人権を世に訴え、その改善を求める組織として活動を展開した。

広川（2012）によると、1980年代頃から1990年代初め、きょうだい会のメンバーの多くが、親亡き後の障害児との生活における困難に直面するようになったという。これは主に成人したきょうだい達の困難として語られたため、成人を中心としたセルフグループが各地で多く作られるきっかけとなった。

その後、1990年代半ばから2000年代、広川（2012）は、30代のきょうだい当事者を中心に、各地できょうだいを支援する団体が発足していったことを述べている。彼らは、自身の子ども時代を振り返り困難を語り合うだけで終わらせず、自身より若いきょうだいを支援する側に回り始めた。こうした団体は、今までのような障害児の権利を擁護したり、親世代の運動を補強したりするのではなく、困難に苦しんでいるかもしれないきょうだいを支援する団体となった。団体の多くは、楽しいレクリエーションや行事を行うセルフグループの形をとっている。

一方で柳澤（2007）は、きょうだい支援を行っている団体や組織の活動について、親睦交流以上になりえていないと指摘する。上述したように、参加者同士でレクリエーションや話し合いを通じた情報や感情の共有を行うことによって、きょうだいの精神的安定を試みる団体や組織の報告こそあるが、それだけでは、きょうだい個別に配慮した活動にはなりきれていないという。特に、自分の置かれた状況を理解できるようになると言われている学齢期のきょうだいに対し、障害児の障害の理解や対応についての具体的な支援は少ないと述べている。先にも述べた戸田（2012）も、きょうだいの発達段階、障害児の障害種や程度に応じた支援の在り方を構成していく必要を指摘している。

ちなみに団体や組織ではないが、阿部（2015）は、きょうだいのためのポートフォリオ絵本製作活動による「障害理解支援プログラム」を開発した。ポートフォリオ絵本とは、きょうだい障害児について学び、話し合う過程で考え、障害児や家族の思い、自身の感情について各々絵本形式で記していくものである。きょうだい自身が障害児との間で体験していることを意味づけ、自身の知りたいと思うことや解決したい課題に関して、自身なりの答えと対応方法を得ることに役立つという（阿部、2015）。きょうだい個々に合わせた支援の実践例の一つであるといえる。

## 5. おわりに

日本において、障害児のきょうだい研究はここ20年ほどの蓄積にとどまり、それは障害児の親の困難に関する研究を追うように始められた。障害児の親の困難は、そのまま、きょうだいが育つ家庭環境となり、障害児を支える役割や親を支える役割を期待されるといっても、経済的な状況、障害児の障害種・程度、親の養育態度、きょうだいの年齢・性別等様々な要因が絡み合って、困難となって立ち現れる。困難の在り方がいかに多様か、最近では質的研究を通して明らかにされ始めているが、きょうだいに対する支援もそれに伴って変化することが求められているといえる。親睦活動以上のものをどう作り出すのかについては、個別報告としてある、発達段階に応じた支援や教育的意図を明確にもった支援にヒントがあるのではないか。

今後のきょうだい支援を充実させるための作業として、まずは広く、きょうだいの支援に関する団体や組織がどのように存在しているのかを把握する必要があるだろう。そもそも、どのような団体および組織であるかによって、支援の目的や現状が異なることが容易に予想されるからである。そして支援者自身が、支援の現状と課題をどう見据えているのかを知る必要があるのではないだろうか。このような知見を踏まえてこそ、きょうだい支援の充実に向けた具体的な模索が可能になると考える。その際、貧困という観点も積極的に導入する必要があるだろう。

### 引用文献

- 阿部美穂子 (2015) 障害のある子どものきょうだいのための障害理解支援プログラムに関する実践的研究—ポートフォリオ絵本の製作活動を通して—, 発達障害研究, 37(3), 223-245
- 稲浪正充・西信高・小椋たみ子 (1980) 障害児の母親の心的態度について, 特殊教育学研究, 18(3), 33-41
- 植村勝彦・新美明夫 (1982) 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて: ストレス・パタン分類, 特殊教育学研究, 19(3), 20-29
- 江尻桂子 (2015) 障害児の母親における就労の現状と課題—国内外の研究動向と展開—, 特殊教育学研究, 51(5), 431-440
- 大瀧玲子 (2011) 発達障害児者のきょうだいに関する研究の概観, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 235-243
- 笠田舞 (2013) 知的障がい者のきょうだいのライフコース選択プロセス: 中年期きょうだいにとって, 葛藤の解決維持及び維持につながった要因, 発達心理学研究, 24(3), 229-237
- 久保紘章 (1982) 障害をもつ家族, 加藤正明・藤縄昭・小此木啓吾 (編) 講座家族精神医学 (3) ライフサイクルと家族の病理, 弘文堂, 157-141
- 窪田知子 (2015) 学校における障害児家族の生活・養育困難とその対応, 障害者問題研究, 42(4), 258-265
- 厚生労働省 (2013) 平成26年国民生活基礎調査の概況,  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/dl/16.pdf>
- 島崎理佐子 (1998) 家族援助における親の会の役割—歴史的変化に応じた援助システム展望—発達障害研究 Vol. 20(1), 35-44
- 田倉さやか (2007) 兄弟姉妹と障害者同胞との関係—母親の養育態度と兄弟姉妹関係との関連—, 児童青年精神医学とその近接領域, 48(1), 39-47

- 田倉さやか (2008) 障害者をもつきょうだいの心理過程—兄弟姉妹関係の肯定的感情に至る過程を探る—。小児の精神と神経, 48(4), 349-358
- 立山清美・立山順一・宮前珠子 (2003) 障害児の「きょうだい」の成長過程に見られる気になる兆候。広島大学保健ジャーナル, 3(1), 37-45
- 田中智子 (2012) きょうだいの立場から照射する障害者のいる家族の生活問題。障害者問題研究, 40(3), 186-194
- 田中智子 (2015) 子育てとケアの境界—家計構造からみた障害児ケアの困難。障害者問題研究, 42(4), 265-273
- 田中正博 (1996) 障害児を育てる母親のストレスと家族機能。特殊教育学研究, 34(3), 23-32
- 戸田竜也 (2012) 障害児者のきょうだいの生涯発達とその支援。障害者問題研究, 40(3), 10-17
- 富沢弥生・横山浩之 (2010) 注意欠陥／多動性障害児の母親へのペアレントトレーニングによる効果の検討。小児と精神と神経, 50(1), 93-101
- 野邑健二・金子一史・本城秀次・吉川徹・石川美都里・松岡弥玲・辻井正次 (2010) 高機能広汎性発達障害児の母親の抑うつについて。小児の精神と神経, 50(4), 429-438
- 新美明夫・植村勝彦 (1984) 学齢期心身障害児をもつ父母のストレス—ストレスの構造—。特殊教育学研究, 22(2), 1-12
- 西村辨作・原幸一 (1996) 障害児のきょうだいたち (1)。発達障害研究, 18(1), 56-67
- 西村辨作・原幸一 (1996) 障害児のきょうだいたち (2)。発達障害研究, 18(2), 150-157
- 林知里・伊藤美樹子・早川和生 (2002) 障害児の親の会 (SHG) へのかかわり方にみた障害児の母親の心理的エンパワメント・プロセス。日本健康教育学会誌, 10(1/2), 9-20
- 平川律子 (2012) 障害児のきょうだい問題とその支援—問題の顕在化の背景および研究, 文学作品, 支援システムにみる歩み—。障害者問題研究, 40(3), 162-169
- 藤原里佐 (2015) 障害児家族の困難と支援の方向性、母親に偏在するケア役割をめぐって。障害者問題研究, 42(4), 250-257
- 前嶋元・米田宏樹 (2003) きょうだい会の設立とその変遷。心身障害学研究, 27, 123-134
- 三原博光 (1998) 知的障害者の兄弟姉妹の生活体験について。発達障害研究, 20(1), 72-79
- 三原博光 (2000) 障害者ときょうだい—日本・ドイツの比較調査を通して—。学苑社
- 望月まり・秋山泰子 (1999) 重複障害を持つ知的障害者の親の思いについて—在宅児通院治療費を長期間続けた親の面接から—。川崎医療福祉学会誌, 9(2), 201-207
- 吉川かおり (1993) 発達障害のきょうだいの意識—親亡き後の発達障害者の生活ときょうだいの抱える問題について。発達障害研究, 14, 253-263
- 吉川かおり (2001) 発達障害児者のきょうだいがかもつ当事者性：セルフグループの意義。東洋大学学術情報ポジトリ, 39(3), 105-118
- 柳澤亜希子 (2007) 障害児者のきょうだいが抱える諸問題と支援のあり方。特殊教育学研究, 45(1), 12-23
- 渡部奈緒・岩永竜一郎・鷲田孝保 (2002) 発達障害幼児の母親の育児ストレスおよびストレス。小児保健研究61(4), 553-560
- 渡辺久子 (1982) 障害児と家族家庭。加藤正明・藤縄昭・小此木啓吾 (編) 講座家族精神医学 (3) ライフサイクルと家族の病理, 弘文堂, 233-253

#### 参考文献

- 浅井朋子・杉山登志郎・小石誠二 [他]・東誠・並木典子・海野千畝子 (2004) 軽度発達障害児が同胞に及ぼす影響の検討。児童青年精神医学とその近接領域, 45(4), 360-371
- 川上あずさ (2013) 自閉症スペクトラム障害のある児ときょうだいの関係構築。日本小児看護学会誌, 22



(2), 34-40

- 桑田左絵・神尾陽子 (2004) 発達障害をもつ親の障害受容過程—文献検討から—, 児童青年精神医学とその近接領域, 45(4), 325-343
- 高瀬夏代・井上雅彦 (2007) 障害児・者のきょうだい研究の動向と今後の研究の方向性, 発達心理臨床研究, 13, 65-78
- 高野恵代・岡本祐子 (2011) 障害者のきょうだいに関する心理学的研究の動向と展望, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 3(60), 205-214
- 高橋脩 (2005) 障害児の発達支援:現状と展望, 児童青年精神医学とその近接領域, 46(5), 437-477
- 田倉さやか (2012) 障害児者のきょうだいの心理的体験と支援, 障害者問題研究, 40(3), 18-25
- 田倉さやか (2013) 発達障害児のきょうだいへの支援—発達障害のある子の家族の理解と支援—, 児童心理, 67(18), 148-153
- 田中亜美・中村奈々子 (2013) 障害児・者を同胞に持つ青年期のきょうだいのきょうだい関係認知とサポート提供行動, 発達心理臨床研究, 19, 19-28
- 田中智子 (2012) きょうだいの立場から照射する障害者のいる家族の生活問題, 障害者問題研究, 40(3), 26-34
- 田中智子 (2015) 障害者と家族の貧困—子殺しから考える家族ケアの臨界—, 人権と部落問題, 67(11), 65-74
- 通山久仁子 (2011) 発達障害のある子どもを持つ親をめぐる動向—その論点の整理のために—, 西南女学院大学紀要, 15, 55-64
- 遠矢浩一 (2004) 発達障害児の“きょうだい児”支援—きょうだい児の“家庭内役割”を考える— (特集 障害児支援をめぐる課題), 教育と医学, 52(12), 1132-1139
- 西村辨作 (2004) 発達障害児・者のきょうだいの心理社会的な問題, 児童青年精神医学とその近接領域, 45(4), 344-359
- 宮本知香 (2007) 障がい児・者のきょうだいの心理的变化の課題, 立正社会福祉研究, 9(1), 53-62
- 矢矧陽子・中田洋二郎・水野薫 (2005) 障害児・者のきょうだいに関する一考察—障害児・者の家族の実態ときょうだいの意識の変容に焦点をあてて—, 福島大学教育実践研究紀要, (48), 9-16

(2016年3月30日提出)

(2016年5月10日受理)



# The Arrival of Previous Studies on Siblings of Children with Disabilities in Japan

**Tatsuno, Kouu**

Graduate School of Education, Special Needs Education, Saitama University

**Yamanaka, Saeko**

Faculty of Education, Saitama University

## Abstract

The purpose of this paper is to elucidate the arrival of previous studies on siblings of children with disabilities in Japan.

At first, we outline the studies on parents of children with disabilities. The home environment including parents' disability acceptance and rearing attitudes have been pointed as one of the biggest causes by that siblings face difficulties.

Next, we focus on the studies about siblings of children with disabilities with about 20 years history following studies above. We can find new trends to understand diversities of each sibling, focus on developmental disabilities and qualitative research, in a few years.

The sibling supports have been started in 1960's. Based on related studies, the flexible supports beyond strengthening friendships are also necessary.

From now on, it is important to gather basic information of sibling support organizations and investigate the real situations including opinions from staffs in practices for enhancing supports.

**Keywords:** siblings of children with disabilities, parents of children with disabilities, sibling support